

# 『岐路燈』における「勸世」の姿勢

——『金瓶梅』との関わりを通じて——

## 一、はじめに

『岐路燈』は、十八世紀に書かれた『紅樓夢』、『儒林外史』とほぼ同時代の作品である。本書は主人公の日常を描くことでそれらにまつわる浮世の繪巻をくりひろげていく「世情小説」であるとともに、世の人を教え導く「勸世」小説ともなっている。一〇八回<sup>(1)</sup>からなる長編大作『岐路燈』は十八世紀の中國、とりわけ乾隆期の開封を中心とした河南の社會をリアルに描いた作品として、文學的價值のみならず、社會史的文献價值も大きいとされたが、日本では「讀破するのは、かなり根氣が必要<sup>(2)</sup>」とされ、知名度が低く研究としては皆無に等しい。本論では未だその全貌が明らかになっていない『岐路燈』に光をあて、小説史における作品相互の影響關係という視點

## 辻　　リ　　ン

から、『岐路燈』の形成を考えるための前提として、その「勸世」の本質を明らかにしたい。『岐路燈』が『紅樓夢』、『儒林外史』とほぼ同時代の作品という點において、小説史を考えるものに食指を動かされる存在である<sup>(3)</sup>ことを思えば、この問題がいっそう重要な意味をもつてくると考えられるからである。

キーワードの「勸世」の意味をまず確認しておきたい。

『岐路燈』に「勸世文、不過借古人的好事歹事、寫個榜樣勸人。這做勸世文的人、也是抱了一片苦心。」(第七一回)とあるように、古のよい事、悪い事を借りて、世の人を教え導く、つまり、勸善懲惡の意味である。同じ用例が『金瓶梅』や『續金瓶梅』にも見られる、例えば、「奉勸世人、勿爲西門慶之後車可也。」(『金瓶梅』序)、「勸世苦心、正在題外。」

『續金瓶梅』凡例)、などが挙げられる。(傍點が筆者によるものである。以下同)

まず、『岐路燈』のストーリーの概略及び作者について、次に簡単にまとめておこう。

『岐路燈』は明の嘉靖期、河南省の祥符縣(今の開封市)を舞臺に、父親がなくなつた後、母親に溺愛された青年書生譚紹聞が「放蕩の徒」と付き合ひ、學業を捨て、賭博、飲酒、女郎買ひにふけり、家財を蕩盡した後に、やっと悟つて再出發するという蕩兒の改心の物語である。舞臺は明の嘉靖年間(1522-1627)に假託されているが、實際に描かれているのは作者と同時代である清の康熙、雍正、乾隆年間の社會で、そこに、官紳からごろつきに至るまであらゆる階層の人物を二〇〇人以上も登場させ、個性豊かに描いている。

この内容からも分かるように、作品は大きく没落と再起の二つの部分に分けられる。第八一回までは主人公が墮落、受難、後悔を繰り返しながら窮地にいたるまでの放蕩ぶりを描いたもので、第八二回から第一〇八回までは主人公が急に立ち直り、息子と共に科擧に及第し、息子も二人の美人を娶るという、いわゆる才子佳人式の大團圓を以つて全篇の幕が閉

じる。この構造と作者の生涯とを照らし合せてみると、前半の没落の部分は作者が四二歳から五〇歳のあいだに書いたもので、間に二〇年間の中斷を挟んで、後半の再起の部分は作者が晩年、六九歳から七二歳までに書き足したものである。<sup>(4)</sup>

作者の李海觀は字孔堂、號綠園、河南省汝州寶豐縣の人で、康熙四六(一七〇七)年に生まれ、乾隆五五(一七九〇)年に没し、曹雪芹や吳敬梓と同時代の人である。農村知識人の家庭の出身で、儒教を尊び、官職に強い執着心を持っていた。六九歳のとき、つまり『岐路燈』の執筆を再開した年、次男が進士に及第し、のちに四品官にまでなった。李家は一躍して官紳家庭に地位上昇したのである。李綠園は八四歳まで長生きし、幸福な晩年を送った。<sup>(5)</sup>

筆者はかつて、『岐路燈』のような「勸世」小説を作者李綠園に書かせしめた要因を分析するにあつて、作者の生きた「康乾盛世」の光と影、及び作者の人生を検討したことがある。<sup>(7)</sup>周知の如く、この時代は康熙・雍正・乾隆と續く清の最盛期であり、思想の規制が厳しい時期でもあった。文字の獄や禁書があいついで起り、知識人は自らの保身に戦々恐々とするようになり、凡そ政府の忌諱にふれるようなことは、あえてしないようになった。また、正統な道學を提唱して猥

藝小説を厳しく取り締まり、著作物への規制が非常に厳しい時代でもあった。これらの規制は、読書人に大きな影響をもたらし、蔵書を自ら焼き拂う者までいた。この時期に書かれた『岐路燈』も當然ながら時代の烙印を押されずには済まされなかった。<sup>(8)</sup>このことは、『岐路燈』がたびたび「勸世」と宣言している重要な要因の一つでもあろう。後述する『續金瓶梅』に「遵今上聖天子欽頒『太上感應篇』以『續』金瓶梅『爲之注解』と特筆大書し、同時代に生きた曹雪芹が『紅樓夢』に「非傷時罵世」という斷りをつけたことから明らかに、當時の文人がよく使う自己保身の手段であるとも考えられる。作者自身と作品がこの時代に生き延びるための斷り書きであろう。また『岐路燈』の中で『金瓶梅』を始め、『水滸傳』や『西廂記』を厳しく批判し、『岐路燈』がいゆる保守的な姿勢をとったこともけっして偶然ではなく、この厳しい體制によってもたらされたものとも言えよう。それゆえに作者李綠園は『金瓶梅』を批判し、『岐路燈』に「勸世」書の性格を持たせ、體制順應のポーズをとらせざるをえなかったであろう。

しかし、李綠園の眞意がどこにあったかはそのポーズとは別に検討されなければなるまい。ここでは、そもそもこの

# 『岐路燈』における「勸世」の姿勢（辻）

「勸世」とは一體なんであつたかをまず深く考察する必要がある。本論ではこの「勸世」の姿勢に注目し、『岐路燈』はいかに『金瓶梅』に影響され、それをいかに作品の主旨に應じて取捨選擇して受容し、いかに「勸世」の姿勢を示したのか、また、その「勸世」の本質的バックボーンを考え、より明らかにするために、同じく『金瓶梅』の影響を受け、「勸世苦心、正在題外」と宣言し、「勸世」の姿を示しながらも『金瓶梅』に批判的な立場をとっていない『續金瓶梅』をとりあげ、對比的に『岐路燈』における「勸世」の姿勢を浮き彫りにし、その本質を説明したい。

『金瓶梅』との関わりを取り上げたのは、『岐路燈』の姿を解き明かす鍵になりうると考えたからである。『岐路燈』は同時代の『紅樓夢』とは、同じく家庭の興亡史であり、登場人物が何百人にもものぼるといった共通点や、『儒林外史』とは官僚世界の暗黒を暴くといった類似性があることから、しばしば比較對照されている。また、『金瓶梅』とも人情世態を描いているという点で比較されることはあるものの、家庭興亡史、寫實手法の受容について表面的に言及される程度で、「勸世」をめぐるテーマについて踏み込んで論述した論文は皆無であり、本論で採り上げた問題はいまだ説明されていない

いのが現狀である。

## 二、『岐路燈』の『金瓶梅』への批判

『岐路燈』の序文と本文では、『金瓶梅』を始め、四大奇書について、かなりの紙幅を費やして批評している。これらの内容は賛否兩極になっているが、矛盾はしていない。稱賛しているのは先行文學の驅使している多様多種の藝術手法であつて、否定しているのは民衆の教化に有害な内容なのである。ここで一例として、『岐路燈』の第一一回の『金瓶梅』について家塾の師侯冠玉が主人公の父親譚孝移へ答えた部分をみてみよう。

「『西廂記』を讀んだ後、『金瓶梅』を講義するつもりです。……あの本はもうたいへん！初めの「熱結冷遇」は、世間人情の變わりやすさに盡きる。後の「豪華に門前で煙花を放つ」は頂點まで盛り上がり、「春梅舊家の池館に遊ぶ」はまたこれ以上ないというほどの冷めようである。このような極端な展開は、すべて左丘明の『左傳』や司馬遷の『史記』から換骨脱胎したものです。」

（「看了『西廂』、然後與他講『金瓶梅』。……那書還了得麼。開口「熱結冷遇」、只是世態炎涼二字。後來「豪華門前放煙花」、熱就熱到極處、「春梅游舊家池館」、冷也冷到盡頭。大開大合、俱是左丘明的『左傳』、司馬遷的『史記』脱化下來。」）

周知のごとく、この「熱結冷遇」はもともと張竹坡の評語である。ここでは、張竹坡の批評に影響されているのは明らかであるが、譚孝移が侯冠玉の話聞き「これは我が子を殺すに等しいことだ（殺吾子也）」と思つていたように、青年達にこのような内容の書物を讀ませる淺はかな教師侯冠玉を風刺した文章である。侯冠玉が賞賛した『金瓶梅』の創作方法、また『左傳』や『史記』を燒き直したのだという藝術手法からみると、それが即ち作者李綠園の意見であるとは言えないまでも、『金瓶梅』ないしその賛否兩極の批評までを熟知しており、作品のキャラクターに應じて巧みに活用していることが、ここからも垣間見ることができよう。そしてなにより、『岐路燈』はこのように、登場人物の『金瓶梅』に對する賛否を通して、巧みに「勸世」の姿勢を示している點に注目したい。

『岐路燈』は放蕩息子の放蕩ぶりを描くのがいわば作品の

見所になっているが、作品の構成、細部の描寫にとりどころどころ『金瓶梅』の影が見え、かなり『金瓶梅』に影響されているのが分かる。例えば、主人公譚紹聞のとりまきは『金瓶梅』の西門慶のそれと非常に類似している。主人公の主な遊び相手である夏逢若は、主人公を誘惑して墮落の一途を辿らせた主な「幫閒蔑片」であって、大屋敷や役所に入り出して、金を騙し取って暮らしている（専門在這大門樓里邊、衙門里邊、吊通走動）（第一八回）。これは『金瓶梅』の應伯爵を容易に想起させるものである。また、主人公につきまとう放蕩息子たちは、それぞれ豪放、軟弱、狡猾、奸智に長けた性格を持つ人物として、個性鮮明に描かれているが、飲食・遊女買・賭博等の惡習を持ち、ついには家財を蕩盡してしまうという特徴も『金瓶梅』の西門慶を圍む遊び仲間白來搶・常時節・謝希大・吳恩典などの人物描寫と共通している。

そして、放蕩息子の放蕩ぶりというところ、「聲色嫖賭」のことを描かないわけにはいくまい。蕩子の放蕩ぶりを活寫する前置きにあたる一言で、『岐路燈』第一九回に「盛公子は官家の不良の弟子であり、譚紹聞は彼と行き來すること、いろいろの知識を十分に増やせるだろう。それには「聲色嫖賭」の事も含まれている（盛公子乃是一個宦門中敗類、譚紹聞與之往

『岐路燈』における「勸世」の姿勢（辻）

來、也足以增聞長識、其如添的是聲色嫖賭之事。」とあるが、放蕩ぶりにおける描寫は明かに「聲」と「賭」に重點を置いている。「聲」と「賭」とは觀劇と賭博のことである。『岐路燈』は、乾隆期の戯曲情況の研究において貴重な資料とされていることから分かるように、戯曲上演の場面が頻出し、登場人物が少なからず戯曲に言及する點がその一大特徴である。また、賭博の場面も、ほかの白話小説には見られないほど、煩を厭わず繰り返し描寫している。しかし、「色」と「嫖」というと、妙に不自然になっている。『岐路燈』は自らも「一部女春秋」（第四一回）と稱して、數々の女性を登場させ、主人公が妓女、女優、下女、皮なめし職人の妻など多數の女性と關係をもつことが言及されている。にもかかわらず、全篇を通じて「色」と「嫖」を描くことを極力避けようとする傾向が見られる。

『岐路燈』の第二四回にある主人公譚紹聞が賭博と女遊びを初めて體驗したときの描寫で、賭場で妓女に部屋へ引き入れられるところで「どうして詳細に記述する必要があるだろうか（何必深述）」と述べた直後、男女の戯れを描寫するのを避けた理由を語る、次のような五言詩がある。

小説家が汚い言葉でこれを細かなところまで描くようなことを見るたびに怪しむ。もし欲を懲しめんとする氣があるならば、なにも淫らな詞で導く必要があるだろうか。『周易』における「金夫」の象、『鄭風』における「(野有)蔓草」の詩というのは、どちらも戒めとすることが出来る。けれども、それらの書物の本来の目的を知らない猿どもには笑いを起こさせてしまう。

(每怪稗官例、丑言曲擬之。既存懲欲意、何事導淫詞。『周易』

金夫像、『鄭風』蔓草詩、盡堪垂戒矣、漫惹教猱嚙。)

おそらく、この詩は、甘公による『金瓶梅』跋にいう「曲盡人間丑態、其亦先師不刪鄭、衛之旨乎」と、『金瓶梅』序で東吳弄珠客のいう「世に戒めとしようということで、世に勧めたのではない(蓋爲世戒、非爲世勸也)」を批判し、異論をなげかけたものであろう。主人公の初めて女遊びを描寫するに代わって置かれたこの詩は「丑言」、「淫詞」を驅使する小説家を誹るもので、これによって、『岐路燈』の「勸世」の姿勢を讀者に示した。

『金瓶梅』が古くから淫書とされていたことは周知の如くである。『岐路燈』のなかでは男女交歡の場面を避けようと

する時、しばしばこのように言明している。

この一段落の描寫は、(表現手法の上で)わざと省略したのではなく、若者のためを考え、まかりまちがっても猥褻な惡の道には踏み込めなかったのである。識者は自ずとその意味を悟るであらう。(第四三回)

(這處一段筆墨、非是故從缺略、只緣爲幼學起見、萬不敢蹈狎褻惡道、識者自能會意而知)

一回また一回と書いているが、『金瓶梅』のような嫌らしいところまでは敢えて倣えない。(第五八回)

(草了一回又一回、矯揉何敢效『瓶梅』)

また、次のようにも書いて、『金瓶梅』を批判した。

巷で流行している『金瓶梅』の如き小説は、淫行を宣傳する書物である。それは、單に作者の遍歴したことを述べたり、やってみたいことを書いたりするものにすぎないものであり、春書を書き添えて、世の少年達を殺すに等しい。(第九一回)

(坊間小説如『金瓶梅』、宣淫之書也、不過道其事之所曾經、寫其意之所欲試、畫上些祕戲圖、殺却天下少年矣。)

逆に考えると、若者のためとはいいながら、このように、ちょっと言及してすぐ休止符をつけた後、必ずと言っていいほど『金瓶梅』などを持ち出し、教化のために描寫はこまめに止めると説明することは、かえって讀者の『金瓶梅』への關心をより募らせることになるのではなからうか。ひるがえって、教化を目的とする作者がこの逆効果を配慮できなくなるほど『金瓶梅』の存在を強く意識していたともいえるよう。『金瓶梅』への頻繁に言及は、少なくとも『岐路燈』を創作する際、作者がつねにそれを念頭に置いていたことの表れであると認められよう。

『岐路燈』は意識的に『金瓶梅』を批判し、またそれだけ深く意識しているために、深く影響も受けていた。このような、ある種の屈折した関わりを持つことになる『岐路燈』の「勸世」の本質は、何であらうか。これを明らかにするためには、『金瓶梅』に對して『岐路燈』とは對照的なスタンスをとる作品を取り上げ、對比的に『岐路燈』の姿を浮き彫りにしてみたい。その對照的な作品とは『續金瓶梅』である。同

『岐路燈』における「勸世」の姿勢(一)

じく『金瓶梅』の影響を受け、また「勸世」小説でありながら、『續金瓶梅』は必ずしも『金瓶梅』を否定的に捉えていない。『金瓶梅』に對して『岐路燈』とは對比的な態度を取る『續金瓶梅』の「勸世」の本質は、どこにあるのだろうか。

### 三、『續金瓶梅』の「勸世」の姿勢——懲惡

あらかじめ、『續金瓶梅』の概要を紹介しておく。『金瓶梅』の最終回(第百回)は、北宋末金軍が清河縣に迫り、宋金戦亂の中に西門慶の正妻である吳月娘とその息子が十日間避難し、また一方では、亡くなった西門慶・陳經濟・潘金蓮・李瓶兒・花子虛、春梅らが濟度され托生する、という場面で幕が閉じる。『續金瓶梅』はこの避難する場面を起點とし、戦亂の中で母子は離ればなれになり、再會するまで十年を要す。この十年の間、親子が互いに探し求めあう流浪の旅が續き、それが物語の基本設定となり、それに轉生した西門慶、及びその周邊人物潘金蓮、陳經濟、春梅らが前世の罪業によって、あるいは地獄で受難する、あるいは生まれ変わってこの世で苦勞するという因果應報の話がひとつひとつ挿入される。結局のところ、『續金瓶梅』は登場人物一人一人の因果應報譚といってもよからうが、ただ、その「因果應報」も詳細に見

てゆけば、次の二種類に分けられる。一つは、吳月娘や應伯爵など『金瓶梅』から生き残っている人物の「現世應報」であり、もう一つは、西門慶、潘金蓮や春梅などすでに亡くなった人物の「轉生應報」である。この因果應報の特徴については、のちに作品の分析によって、自ずと明らかになってくう。

以上の粗筋からも分かるように、『續金瓶梅』は、物語の中心人物や構想がかなり『金瓶梅』のそれと異なっている。『金瓶梅』は西門慶の日常活動を中心に、さまざまな人物が密接に絡み合って一つの物語を作り上げている蜘蛛の巣状の構成になっている。それに對して、『續金瓶梅』は宋金戰亂の中、母子が生別れてから再會するまでの十年間という基本設定こそあるものの、物語の中心軸にはなっていない。登場人物の一つ一つのエピソードが『水滸傳』に似ており、まったく無關係とはいえないが、ほとんど獨立した形をとっている。『金瓶梅』は英雄の銘々傳とされる『水滸傳』の武松説話、及びその登場人物を借りて、物語を展開させたものであるが、構成などまったく『水滸傳』と違った作品になっていることは、よく知られている通りである。『續金瓶梅』は、『金瓶梅』の最終回の宋金戰亂の十日間避難する話を受け、

一部の登場人物を借りて發展したもので、その構成もまた物語のもとである『金瓶梅』と違った形になっているが、登場人物個々の因果應報譚という點が『水滸傳』の英雄の銘々傳と類似することは興味深い。但し、このような物語の受容と變容に關する詳細な検討は別稿に譲るとして、ここではひとまず以下のことを確認しておきたい。『岐路燈』は『金瓶梅』を批判しながら、通說に従えば、構成が『金瓶梅』と類似している<sup>(10)</sup>、對して、『續金瓶梅』の構成は『金瓶梅』のそれとかなり變わっている點である<sup>(11)</sup>。

『續金瓶梅』の作者である丁耀元（一五九九—一六六九）については、その經歷に未だ諸説あるが、ここでは、張清吉『丁耀元年譜』に基いて概括しておきたい<sup>(12)</sup>。丁耀元は山東諸城の人、字は西生、號は野鶴、紫陽道人などがある。多才多作だが科擧に及第できず、のち、明王朝が倒され、明清戰亂の中、家族も亡くしてしまい、やむえず「遺民」になる。順治一八（一六六二）年、六三歳で『續金瓶梅』を完成し、康熙四（一六六五）年、六六歳の時二二〇日間投獄され、『續金瓶梅』が禁書とされ、焼かれた。のち釋放されたものの、この二二〇日間の監獄生活と精力を傾けて書かれた『續金瓶梅』が焼かれてしまったことで、七〇歳近くの老人である丁耀元



は大きな打撃を受けたに違いない。<sup>(13)</sup>その後、丁耀亢は失明した。最後は失意の中で世を去った。『岐路燈』の作者李綠園と對照的に、丁耀亢は不遇な晩年を送った。

『續金瓶梅』は「小説の形をした善書」と言われるほど佛經、道經、史書、經書などの典籍から多くを引用し、自らも目録の後に引用書目五四種を挙げている、また、毎回の冒頭にも、まず『太上感應篇』の項目を引いて、これをテーゼのように使って物語を展開していくというユニークな形をとっている。<sup>(14)</sup>それに、引用書目の後ろにも、『太上感應篇』全文を掲げ、善道二四條、惡道一五三條を簡條書きにし、文字によらず、○と×の數で善惡の程度を示す。<sup>(15)</sup>これを「太上感應篇陰陽無字解」と題する。ここで注目すべきは、惡道がはるかに多い點である。

このように『太上感應篇』を多用する形式は通常小説には使用されない手法であり、善惡の程度の示し方もまた、從來の善書の功過格の形式をそのまま援用しているのが明らかである。それゆえ、小川陽一氏が明清小説における善書の影響という視點から、『續金瓶梅』を極端な例として取り上げ、それを「小説の形をした善書」と評したのは無理もないことであろう。しかし、『太上感應篇』の多用という形を作品の

内容的特徴と結びつけてみると、私見では、それはむしろ作者丁耀亢が施したしかけだ、と位置づけたい。

『續金瓶梅』の内容的特徴についてはしばしば、亂世の歪みを描き、亡國の悲しみを表出、と批評されている。これは作品を一讀して容易に分かることであるため、本論では、更に付け加えるべき點は何もない。ここではあらかじめ、論旨と關わりある部分を先行研究を参考にし、以下にまとめておきたい。<sup>(17)</sup>

『續金瓶梅』はユーモラスな筆致で亂世の歪みを活寫し、その原因は明末朝廷の腐敗した社會にあると大膽に批判している。小説の最後に「諸惡をなさなければ吉神が付き従ってくる……私が述べている『續金瓶梅』もまさにこのことである。世の中に（本書を）説いて聞かせることで、いま皇帝さまが頒布した『感應篇』『勸善錄』の教えを廣めることができる（諸惡莫作、衆善奉行。……我今講一部『續金瓶梅』也不過此八個字。以凭世人聽解、纔了得今上聖頒行感應篇、勸善錄的教化。」と述べ、『續金瓶梅』はいま欽頒した感應篇、勸善錄を理解する助けのためであると斷っている。本来、朝廷が善書を頒布するのは民を教え諭すためである。しかし『續金瓶梅』は、朝廷に向かって「國の俸祿を食みながら、民に盡さず、賊

にも勝る惡事を働くものには、どうして法律上許され、天罰を受けぬ道理があるだろうか？（食了朝廷俸祿、不能爲民、反行酷暴比盜賊加一等、那有不犯王法、不遭天刑之理）」（第七回）と批判し、また、「根本から一層ずつ掘り起こしていくことによって、これら邪淫惡風が士大夫たちのちよつとした邪念や嫉妬から生じたことを讀む者たちに分からせる。（一層層說到根本上去、叫看書的人知道這淫風惡俗從士大夫一點陰邪妒忌中生來）（第三四回）」と大膽に宣言する。

同時に、亡國の悲しみも『續金瓶梅』の隨所に滲み出ている。作者は、宋金戰亂に假託しながら作品の中に多くの痕跡を散りばめ、宋即ち明、金即ち清であることを讀者に暗示している。例えば、周知のごとく、「厂衛」「錦衣衛」（第六回、第一九回）はともに明代の官廳であり、第二八回、第三五回に現れる「藍旗營」、「旗下」等は、清の八旗制度に特有のものであることが明らかである。第五三回では金人が揚州を占據した後のことを「清平三百載、典章文物、掃地俱休」（第五五回「滿江紅」詞）と詠っている。實際、宋代王朝は一七六十年しかなく、明王朝は三百年近くも（一三六八年から一六四八年までの二八〇年）存続した。こゝも明らかに明王朝を指している。そして、描かれている金兵の強姦略奪の非情さや殺

戮の悲惨さは、『揚州十日記』を想起させる。丁耀亢は宋金戰亂に假託しながら、目の當たりにした明末清初の亂世をありのままに描いている。また、第六二回に陶潛『搜神後記』の丁令威の物語を借りて、語り手が明の人である丁野鶴と名乗り、「朱頂雪衣」の格好をする鶴から化けてきたというエピソードがある。（『續金瓶梅』は紫陽道人著と記しているが、魯迅『中國小說史略』ではこのエピソードから紫陽道人即ち丁耀亢であることに気づき、作品の著者を明らかにした。）この「朱頂雪衣」はじつは、丁耀亢の號「野鶴」と意味が通じており、また「朱」というのは明王朝の皇帝の苗字で、「雪衣」は白い衣で、つまり喪服のことに違いない。ここにも滅ぼされた明への深い悲しみが表れている。

こうしてみると、『續金瓶梅』は「小説の形をした善書」にとどまらず、さまざまな姿が見えてくる。晩清の夢筆生による『金屋夢』<sup>(18)</sup>の凡例にこの作品を「社會小説とも宗教小説とも、また歴史小説とも哲理小説とも、さらには風刺小説とも政治小説とも讀むことができる（可作社會小説讀、可作宗教小説讀、可作歷史小説讀、可作哲理小説讀、可作滑稽小説讀、可作政治小説讀）」と紹介している。筆者はこの意見に賛同する。當然ながら、それだけユニークな作品であるため、批評も賛否

兩論である。例えば、清の劉廷璣は『在園雜誌・卷三』で「有失演義正體」、「道學不象道學、稗官不成稗官」と批評している。また現代では、小説らしくないのが『續金瓶梅』の「大きな缺點」(重大弊端<sup>⑩</sup>)と批評するものもあるが、王汝梅は「丁耀亢的『續金瓶梅』創作及び小説觀」<sup>(20)</sup>の中で、丁耀亢が「小説作品の新たなスタイルを作り上げ、(中略)史書、經書、筆記、長編小説を一體化した」と高く評價している。

これらの評價が賞賛にしろ、批判にしろ、ここで重要なのは、『續金瓶梅』は『金瓶梅』から大きく變容していることである。『續金瓶梅』は『金瓶梅』の續書としているが、『續』して承けたのは、ほとんど宋金戰亂という背景、主な登場人物、及び情交の場面ぐらいにすぎない。つまり、そういうパターンを借り、『金瓶梅』を肯定しながら、構想や手法、主旨を大きく變容させて、獨自のものを作り出していると言ってもよからう。

ひるがえって、『續金瓶梅』の中で重要な役割を果たした『太上感應篇』をみてみよう。『續金瓶梅』集序に「遵今上聖天子欽頒『太上感應篇』、以『續』金瓶梅爲之注解」と書いてある。實際、順治十三年「上諭頒布『太上感應篇』」という歴史事實の記録もある<sup>(21)</sup>。丁耀亢は『太上感應篇』という

『岐路灯』における「勸世」の姿勢(辻)

隠れ蓑の下で、忌憚無く亂世の繪卷を繰り廣げ、體制を非難、鬱憤を晴らし、亡國を嘆いた。つまり、『太上感應篇』は單なる借りものに過ぎず、眞の目的は明らかに懲惡にある。『太上感應篇』は作品の主旨である懲惡の目的を實現するために、丁耀亢が施したしかけなのであることを思うとき、『續金瓶梅』は善書の形にした「勸世」小説といっても過言ではなからう。思うに、明末清初の社會の惡弊を暴く(懲惡)のに、『金瓶梅』の最終回に設定されている宋金戰亂がもっとも相應しい背景だから、その續書にしたのではなからうか、との考えもできよう。

以上、『岐路灯』の比較對象として、『續金瓶梅』の作者、及び作品の主旨、構成、特徴を検證してみた。次節では、再度『岐路灯』について考察することにする。

#### 四、『岐路灯』の「勸世」の姿勢—勸善

實は『岐路灯』の中にも『文昌帝君陰騭文』という善書が使われている。これは『續金瓶梅』の『太上感應篇』ほど多用しておらず、脇役の正人君子の會話にしばしば言及される程度である。考えてみれば、それももっともなことであらう。文昌帝はもともと科擧や官界で出世を司る神として民間に手

厚く祭られていたが、儒教を尊び、「生眞面目」な李綠園が、『岐路燈』の中で善書を儒家の經典より目立つ位置に置くことは、むしろ不可能であろうし、正人君子が脇役である以上、その出番が多くないのも當然であろう。しかしそれなのに、作品を読むと、『文昌帝君陰騭文』がよく言及されている印象を拭いきれない。『岐路燈』は「幼學目不睹非聖之書」（第一一回）、「畫上些祕戲圖、殺却天下少年矣」（第九一回）と、『金瓶梅』をしばしば貶め、儒教の經典を薦めることが顯著であるが、その一方、陰德思想も全書に見え隠れしている。例えば、孝婦が殉節した井戸から香りが漂う、科擧の受験者が善行によって幽靈の力で合格する、忠僕が埋藏金を掘り出すなど、「形象は必ず實を寫すべきである（形象必須寫實）」（自序）と主張しつつも、ストーリーの流れとまったく関係ないエピソードが挿入されている。これらの挿入はよくでたらめだとか、蛇足だと批評されてきたが、蛇足かどうかは別として、意圖したものには違ひなからう。では、その意圖は一體なんであろう。それらのエピソードをピックアップしてみると、一つの特徴が容易に見えてくる。それは、善行をなせば必ず報われるということである。作品の「勸世」効果を高めるべく、作者なりの工夫が伺える。つまり、その意圖は善

行を勧めることだと思われる。又、思うに「後半の筆意は前半に及ばない（後半筆意不逮前茅）」と『岐路燈』自序で自らそう評しながらも、前後の整合性を缺く非常に味氣のないハッピーエンドを書き足したのも、よい結果をつけたいとの意識があったからとも考えられよう。

ところで、同じく「勸世」を目的とする『岐路燈』と『續金瓶梅』であるが、それぞれ『文昌帝君陰騭文』と『太上感應篇』を使い分けていることが興味深い。この二つの善書については、酒井忠夫『中國善書の研究』（圖書刊行會、一九七二）に詳しい論考があり、いまさら贅述しない。ただ、ここで一つ強調しておきたいのは、『太上感應篇』『文昌帝君陰騭文』がともに因果應報を説くにしても、前者は惡因惡果に重點をおくことに對し、後者は陰德陽報の思想にたっていることである。これはすなわち、『續金瓶梅』と『岐路燈』のそれぞれの特徵であって、根本的な違いだと考えられる。換言すれば、『續金瓶梅』は懲惡に主眼があつて、これに對して『岐路燈』は、全書を貫く「勸世」の本質である「勸善」に力點が置かれていることになる。

このように、『岐路燈』は『金瓶梅』に影響されつつも常に意識的に批判するゆえ、世情小説の形式を持つ、「勸善」

書となった。この點も『續金瓶梅』と對照的である。『岐路燈』は『金瓶梅』を否定しながら、實際には構想、創作手法をかなり受容している。

## 五、おわりに

本論は『岐路燈』の理解をより深めるため、類似性を持つ『續金瓶梅』と比較しつつ、『岐路燈』の「勸世」の本質を説明することを試みた。検証したものを整理すれば、ほぼ以下のようになるだろう。

同じく『金瓶梅』に影響され、「勸世」の姿を持つ二つの作品だが、『續金瓶梅』は『金瓶梅』を肯定しながら、構想や手法、主旨を大きく變容し、説いた因果應報も惡因惡果に重點を置き、創作の目的が懲惡にあると確認できる。對照的に、『岐路燈』は『金瓶梅』を否定しながらも、構想、創作手法においてはかなり受容している。そして、その「勸世」の本質は「勸善」であることが確認できる。『岐路燈』の所謂「何必效瓶梅」は、單なる男女關係を描寫する「淫詞」を避けただけにすぎない。ここから、「淫書」とされる『金瓶梅』を熟知し、無意識にそれに強く影響されつつも古いモラルに支えられ、それを守ろうとする作者の姿が伺える。と同

『岐路灯』における「勸世」の姿勢（辻）

時に、『岐路燈』が意識的に「勸世」色に濃く彩られたことをもみることができるといえる。『岐路燈』は、當時の民衆のさまざまな日常を語る『金瓶梅』の流れを汲みながら、さまざまな風俗・人情を借りて善を勧めんとするところに力點がおかれているのである。

明清小説が善書と深い関わりを持つことはすでによく知られている。それらの作品には、善書の觀念を根據として、勸善懲惡を説く即ち「勸世」する、あるいはそのポーズを取るものが少なくない。だとすれば、「勸世」の姿をコードとして、作品を解き明かす方法も考えられよう。『金瓶梅』序にいう「世の戒めとしようとするので、世に勧めたのではない（蓋爲世戒、非爲世勸也）」という斷りからも明らかのように、作者の本心のあり方とは別に、「勸世」の姿勢という視點からみれば、「淫書」とされる『金瓶梅』も「勸世」のポーズを示していると認められよう。また、既述の如く、『金瓶梅』に對して批判的な立場に立っていない『續金瓶梅』も言うまでもなく「勸世」小説である。そして、一讀して分かるように、『岐路燈』の「勸世」の姿は『金瓶梅』への批判によって示そうとした。「勸世」書である『岐路燈』が「淫書」である『金瓶梅』を批判するのは當然のことだと思われがち

だろう。それはそれで間違っていないが、しかしそのために、意識的に批判し、批判しつつ無意識に受容という、小説史における重要な作品相互の影響関係まで無視してしまうことは決して正しくないと考ええる。

## 〔注〕

- (1) 抄本によって、一〇四回本、一〇五回本、一〇六回本、一〇八回本などがある。『岐路燈』は乾隆四二（一七七七）年に完成したが、一九八〇年樂星が中州出版社から校訂本を出版したことにより、完成して二〇〇年後にやっと完全な活字本になったもので、樂星が校勘の過程で抄本の流布の経緯を詳細に検討し、もとは一〇八回であると確定した。なお、本論の作者と作品に関する資料は、『岐路燈』の校訂者である樂星が収集、整理、出版した『岐路燈研究資料』（中州書畫社、一九八二）に依據した。また引用した『岐路燈』本文もすべて中州書畫社より出版された樂星の『岐路燈 上・中・下』校注本に基づく。
- (2) 寺村政男『増修金瓶梅研究資料要覽』華文編補遺、付『岐路燈』研究資料要覽、『中國語研究』二九號、白帝社、一九八八、六三頁。
- (3) 鈴木陽一『岐路燈』割記、中國文學研究會『中文研究集刊』創刊號、一九八八年二月。
- (4) 作品の執筆経過に關して、作者の李綠園は『岐路燈』自序で言及している。『岐路燈』の校訂者樂星はこの序文及び地方志の記載から作品の創作経緯をこのように推定した。
- (5) 寶豐は河南省のほば中央、洛陽及び鄭州からは南へ一〇〇キロ強の距離にあり、華北平原のほば西端に位置する。
- (6) 李綠園については、樂星『岐路燈研究資料』（同注1）に所収する「李綠園傳」及び鈴木陽一『岐路燈』割記（同注3）に詳しい。
- (7) 修士論文『岐路燈試論—蕩兒改心の意味—』、二〇〇二年二月埼玉大學大學院文化科學研究科に提出。
- (8) その例として、『岐路燈』を執筆以前にあたる、李綠園の青年期に發生した事件をいくつ挙げてみよう。雍正三（一七二五）年、王景祺は吏治の弊害をあらわした『西征隨筆』のなかで清を譏っていると告發された。また雍正四（一七二六）年、査嗣庭は江西の郷試で時事を風刺した科題を出題、とくに「維民所止」の語句は雍正の字の首をはねたものとして斷罪され、病死後に死體がさらされた。そののみならず、汪景祺と査嗣庭がともに浙江の人であったため、この年「觀風整俗使」が浙江に設置され、浙江の科舉試験が三年停止された。『清史列傳』卷七十一の二十三査敬庭の條及び『中國史 四・明清』（山川出版社、一九九九年六月）を参照。）
- (9) 代表的な一例として、樂星が『岐路燈』校本序の中で次のように書いている。「作者は寫實的手法を用いて、廣範圍に

渡る社會生活の繪卷を讀者に提示しており、一つ一つのエピソードは、それぞれ獨立した風俗圖を構成している。創作態度に關して彼は、『水滸傳』は罪を煽るもの、『金瓶梅』は淫行を勧めるものとして批判しているが、明代白話小説の寫實主義の傳統をしっかりと繼承し發展させるものになっている。

- (10) 例えば、孫遜・孫菊園「論『岐路燈』的思想藝術成就及其局限」の中にこう述べている。『岐路燈』借鑑和繼承了『金瓶梅』の結構形式、它也是以一個家庭爲中心、由記載一家的盛衰而擴及當時整個社會」(明清小説叢稿)、中國文化大學出版社、一九九二年、三三八頁。

- (11) 『續金瓶梅』の構成については、拙稿『續金瓶梅』の構成をめぐって」(『早稻田大學大學院文學研究科紀要』第四九輯、二〇〇四年二月)を参照されたい。

- (12) 丁耀亢については、日本では大塚秀高「丁耀亢の小説と戯曲」(『埼玉大學紀要・教養學部』第二七卷、一九九一年)、伊藤淑平「王漁洋と山左詩人——丁野鶴及び邱海石を中心として——」(『二松』第九集、一九九五年三月)に論考がある。また、中國では、近年雜誌に發表された各種の論文のほか、張清吉撰『丁耀亢年譜』(南京大學出版社、一九九六年)、李增坡主編『丁耀亢研究——海峽兩岸丁耀亢學術研討會論文集』(中州古籍出版社、一九九八年)、李增坡主編、張清吉校點『丁耀亢全集』(中州古籍出版社、一九九九年)などまとめた著書も出されている。これらの研究によって多くのことが

明らかにされたが、いまだ見解の一致をみない問題も少なくない(例えば、丁耀亢の生卒年や『續金瓶梅』の執筆開始時期など)。本論のこの部分は、近年丁耀亢研究の集大成とされる張清吉撰『丁耀亢年譜』に依る。

- (13) 投獄について、『乙巳八月以續書被逮、待罪候旨、至季冬蒙赦得放還山、共計一百二十日。獄司檀子文馨、燕京名士也、耳予名、如故交、卒諸吏典各釀酒、三日一集、或至夜半、酣歌達旦、不知身在籠中也。各索詩紀事、予眼昏作粗筆各分去、寄詩志感』という長い題の詩がある。また、焚書を嘆いた詩については次の一首を引こう。『歸山草・焚書』「帝命焚書未可存、堂前一炬代招魂。心花已化成焦土、口債全消淨業根。奇字恐招山鬼哭、劫灰不滅聖王恩。人間腹笥多藏章、隔代安知悔立言」。なお、上記の二首の詩はいずれも李增坡主編、張清吉校點『丁耀亢全集』(注11)によるものである。
- (14) 『續金瓶梅』のこの點については、小川陽一『日用類書による明清小説の研究』の「第四篇 明代小説と善書」(研文出版、一九九五年)を参考にした。
- (15) 『古本小説集成・續金瓶梅』(上海古籍出版社)による。ただ、小川陽一『日用類書による明清小説の研究』の「第四篇 明代小説と善書」には「惡道一五七條」としているが、どのテキストによったかは不明である。
- (16) 人間の行爲を功(善)と過(惡)に分け、箇條書きにしてそれぞれ點數を施した形を功過格と稱する。

(17) 薛亮『明清稀見小説匯考』(社會科學文獻出版社、一九九九年、二三八～二五六頁) 及び黃霖「金瓶梅續書三種・前言」(齊魯書社、一九八八年) を参考にした。なお、『金瓶梅續書三種』には、『續金瓶梅』の順治刻本を底本とする山東省圖書館抄本と北京圖書館抄本によって校訂した活字本が収められている。

(18) 『續金瓶梅』の改作本である。一九一五年『鶯花雜誌』の創刊號から連載し、まもなく單行本としても發行される。時流に合わせるためか、『續金瓶梅』の因果觀を説く部分を大幅に削っている。

(19) 『中國通俗小説評傳』、中州古籍出版社、一九九三年、一三五頁。

(20) 李增坡主編『丁耀亢研究—海峽兩岸丁耀亢學術研討會論文集』所收。中州古籍出版社、一九九八年、一六二頁。

(21) 『順治實錄』卷八八。

(22) 陰德あれば必ず陽報あり(出典『淮南子・人間訓』)。

[附記1]

本稿は、早稻田大學中國文學會第二八回大會(二〇〇二年十二月)にて、口頭發表した概要を加筆したものである。鈴木陽一先生、寺村政男先生を始め、諸先生から貴重なご意見をいただいた。また、執筆にあたって大塚秀高先生から多大なご教示を仰いだ。ここに記して厚くお禮申しあげる。

[附記2]

本稿は早稻田大學二一世紀COEプログラム「アジア地

域文化エンハンシング研究センター」の研究成果の一部である。